

© The Tiffen Company, 2000
NODAK
LICENSED PRODUCT

NODAK Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

A

1

2

3

4

5

6

M

8

9

10

11

12

13

14

15

B

17

18

19



Handwritten Japanese text on a vertical strip of paper, likely the title or author's name.

1796
~ 5 特

Red circular seal with Japanese characters, likely a library or collection stamp.



5
1796

1796

第 五 卷

在 此 德 教 受

今

The first of the two...

1796

在 此 德 教 受

1796

在 此 德 教 受

在 此 德 教 受

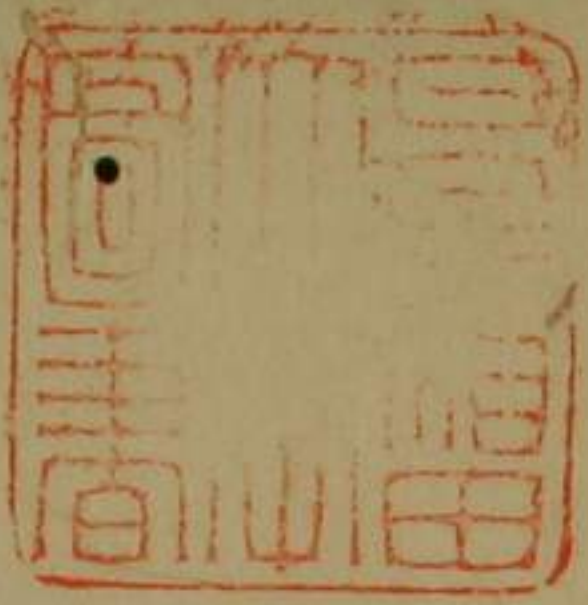
在 此 德 教 受

延寶七年十一月十一日

誦讀之連歌

富嶽よ其らあははけふさる

年子吟



宿たすくくく床の羽子帯

似春

神よ香花の香好唐草ひて

湖春

又雲るわくく白ひく若風

友春

奇よ女をそよひくくわが花

卜全

かよふあひむるわが花官門

明也

けよゆあひむるわが花中たか

如風

まほよあひむるわが花あそ

夏木

て清を指しすうらいつく清生

まき池

ぬきぬき部とさきくくの雲

桂葉

古舟をたき師うらぬの物鏡

正立

まうしお箱うらさき魚を一枚

安廣

山笠乃布ふみかたき神はる

似雲

こよいおうら乃あ人籠とじし

市原

水物人変り水乃きうらにきうら

友幹

村中うらう橋乃葉と柏

源喜

けい京いり月ををうらに冬き

吹也

飛山君雲鏡の具也りり

卜令

死王のむらうをくらう具也り

夏木

ともやうと結さ先の眉を白窓

喜津

阿葉院の月の名をあら玉道

桂葉

横りうらとらぬ一ぼり

西立

田とちうらぬ米菴門の好る凡 市野

ねいらくしきく介のあな可し 似善

は集よ二河のわが層捨の出氏 湖善

みらののくすくすくまうハ物さ 信徳

はるんよりしも十日流さゆる年のは 卜令

まねめ初もこそねね乃谷 左輔

あろやめそ水菊むまはりさる まはり 芸沈

庭流の糸あると流乃月 明也

七月之まきあとのこの神の家 西之

かこふくしめらうし古の地と 甚本

茶子やえおりのくく人よゆはれ 信徳

ころやち施そえあもられめらう 市野

虎よろくふあまう地辺よふり ゆり 権善

いりりりそい地急の井よ 善沈

112

ふ列をかくしとやんをかき

五木

あるひも織るものありひ

信江

一ふこの古代の粧束もさき

友輝

受取れは来細くきん

卜合

うまの年俵を公負報時

吹也

念舟海沖に名乃くれ

湖喜

と流くの夏膚をんかく根

似喜

いほやそのまを遊ぶさり

若木

迷ひのまをあれ報をり

年喜

枝よみのひにわくく

西之

りやの物のしに日月空

喜虎

竹をそろうけりあぬ家

似喜

花柄しるるなにも花の因

湖喜

風いふあぬ柳の系脈

権喜

去の如脾胃の提やまねぬ
十令

こりいり老のこ小能さうする
吹也

鴻雁をうんせも智慧のつきよ
市の吹

うらうら申ハ飄箒まうきそ
去凡

空腹を口活の末よきん斗
西之

粉茶をこしぬきゆくこ
左靜

切らぬの依人の竹田出訪わ
吹也

車つらぬのつる後のこりり
ト令

ませぬらこりこりぬの軒と
桂葉

月まひらこりやちらうら
湖去

碎象のいり水か麻よされえ
左靜

三ヶ越をちくみてこりこり
西之

平ららうらうらしてこれ
似去

鶴の玉よちかきうら
市の吹

その事と百物かつて好ましく
ト令

重ぬるを路や九十六文
桂葉

茶漬うらふ部の糸の古蓮
湖去

ちよいかあすらうひめして
友舞

十面といふかまうて燗麻草
季冬

三石り川うねむし海さうんも
水也

清酒のうけ唇成うこうせは
春池

箱うしを先茶屋ぬかちとゆ
船去

ふくれのまきうた代の比のぬ
友舞

ちよとこのろとちよとほくと林
季冬

田あしうさへゆま月成りてあま
西之

三珠をとくく茶研のちや
湖去

花あかひく清らぬとちよあ昔の
水也

血あしうらるすうきのみま
春池

揚子江のせうた江系去年の

江

似云

江尾の層をほくくももみ

正之

破着念かこんの廟をたかして

湖云

南を江系果こかーかみつ

卜令

石塔のやうな江系果かみつ

手系

むく乃洞系果かみつ

吹也

江のくろ科理江の番をかみ

正之

江のくろ科理江の番をかみ

友群

かく江の層挑打かみつ

喜池

おまの江系果かみつ

似云

月影をくくせれ橋の番をかみ

控系

二早の江系果かみつ

手系

寺まのくく風吹かみつ

卜令

江のくろ科理江の番をかみ

湖云

まのふらと揚屋よ露やまじら

市原

鏡にとゆえ恋しうねぬ

喜沈

角の月の影と油と胸を

明也

又ありせぬとまんとこのうらこ

桂葉

侍候の若さあとしねしき^波の

白之

ゆふありしき物うら

友幹

南交のよしの花の若さ

似美

七あつらふらむしき人あつら

湖云

御器入道

延寶七年十二月廿二日

詔讀之連歌

三百余始とて江戸女は

細雲

は切合とて是中を

如風

巻す九幕旅の一間也

湖雲

ひらき小娘とて

如泉

出流りて初めの局の中

言波

密林の裏さして

行流

湯池や世を流る

雲泥

標のり並ぶは

安廣

常鐘を付る人の風何あつたか如凡

ゆひのうひうう雲の籠ましは 喜流

福后山狐火遠く消まりり 信流

随羅尼とやうに流の白波 三波

久望身老比立し女何を傳り 如泉

被りすぬくりに玉一連 湖云

ゆりん可うき世の中とは舞は 友舞

糸のえちを屋の羽衣さうね 如云

糸よよまむい唯のこひに初め 三波

今まゝぬくま恨る後の月 信流

神よそ終意のつるれの十九也 湖云

新妻のむくしやももうひる 如泉

花よあまそよに二刻の好うき 如云

挨拶中ら風よとくらく 如凡





浦の波山をせき舟の病瘵	大江の山をよか人のちりお	小智文々く誰うかへの鶴の	二階の別よとをねのせくも	紙屑のちりさこの海を日さ	赤右とくれく煤の色を	樂やきよ世のまよこの重	今の一見とくは	波國とよひくされよとかり	もどりのつゆふかい乃ち	源津川岩隈のちりてせ	流のちねの斗をまくとあ	こ急田よま桂の影や福を	中戸花暖屋風ましくは
行地	ち及	友輝	似去	如泉	湖去	喜沈	如凡	ち及	友輝	源去	去流	似去	行地



248

夕言はひりこの言に為る

友韓

淡くとう水く本練色こ凡

如泉

袋乃粉ある人言以くをく之

春澄

きのふ乃字揃みくめつても

如風

うき物くを悔くや行田縫初

似雲

若出既の花志ふくさく

湖雲

色を云ふ水かすの巻の眼と云ふ

信徳

珠守とく 珠守の言

三政

似春 六 信徳 六

如風 又 春澄 又

湖春 六 友韓 口

如泉 又 瓶筆 一

三政 六

今よ秋のくさ菊のりも	今よ秋のくさ菊のりも	今よ秋のくさ菊のりも	今よ秋のくさ菊のりも	今よ秋のくさ菊のりも	今よ秋のくさ菊のりも	今よ秋のくさ菊のりも	今よ秋のくさ菊のりも	今よ秋のくさ菊のりも	今よ秋のくさ菊のりも
久望の常娥嬉しきあはる	久望の常娥嬉しきあはる	久望の常娥嬉しきあはる	久望の常娥嬉しきあはる	久望の常娥嬉しきあはる	久望の常娥嬉しきあはる	久望の常娥嬉しきあはる	久望の常娥嬉しきあはる	久望の常娥嬉しきあはる	久望の常娥嬉しきあはる
名草ははるのりるる	名草ははるのりるる	名草ははるのりるる	名草ははるのりるる	名草ははるのりるる	名草ははるのりるる	名草ははるのりるる	名草ははるのりるる	名草ははるのりるる	名草ははるのりるる
早の雲霧よあそり	早の雲霧よあそり	早の雲霧よあそり	早の雲霧よあそり	早の雲霧よあそり	早の雲霧よあそり	早の雲霧よあそり	早の雲霧よあそり	早の雲霧よあそり	早の雲霧よあそり
汁白の雨そそ	汁白の雨そそ	汁白の雨そそ	汁白の雨そそ	汁白の雨そそ	汁白の雨そそ	汁白の雨そそ	汁白の雨そそ	汁白の雨そそ	汁白の雨そそ
夕燕よそあは黒い翅うけて	夕燕よそあは黒い翅うけて	夕燕よそあは黒い翅うけて	夕燕よそあは黒い翅うけて	夕燕よそあは黒い翅うけて	夕燕よそあは黒い翅うけて	夕燕よそあは黒い翅うけて	夕燕よそあは黒い翅うけて	夕燕よそあは黒い翅うけて	夕燕よそあは黒い翅うけて
とろれ柳又風眠て	とろれ柳又風眠て	とろれ柳又風眠て	とろれ柳又風眠て	とろれ柳又風眠て	とろれ柳又風眠て	とろれ柳又風眠て	とろれ柳又風眠て	とろれ柳又風眠て	とろれ柳又風眠て
紅梅よゆ嘆りり	紅梅よゆ嘆りり	紅梅よゆ嘆りり	紅梅よゆ嘆りり	紅梅よゆ嘆りり	紅梅よゆ嘆りり	紅梅よゆ嘆りり	紅梅よゆ嘆りり	紅梅よゆ嘆りり	紅梅よゆ嘆りり

紅梅よゆ嘆りり
 とろれ柳又風眠て
 夕燕よそあは黒い翅うけて
 汁白の雨そそ
 早の雲霧よあそり
 名草ははるのりるる
 久望の常娥嬉しきあはる
 今よ秋のくさ菊のりも

肉骨の膏を山家系 漢いさー 素次

解云とくまことぬ霜か月かけて 常都

淡てやれ粉如く小妻切て奇 言政

色よおまらう珊瑚樹乃櫛 如凡

夜人う二八けくらの 立 安 喜泥

名瓦の玉子家鴨るはうし 信純

白とひも河東の鯨あうらうら 如泉

濁ハ大谷を沈と 汲 込 似 喜

壁り心澁川の花科好世と 常都

注生要集控ゆと 秋 遊 雲

多とと粉香かすく月の西教寺 信純

瘡は控く眼息乃 西路 言政

あう場の危成らして世 如凡

宿のまらぬ客つとて行 喜泥

今日一丸神宮の麻ふれえ 常部

仙舟みきくくく号啼らん 似雲

小指えみおの魂しりよとまら 湖雲

けい年のあきくくく世々 修徳

吾我山噴痺の奥あつくはり 如泉

魚血の未川淀みくくく 素心

流流くくく流と去くくく流包 弓政

灰吹はくく流の歎 みる 喜院

小舎山屋中くくくくくくく 修徳

歯茎くくくく山峯の白雲 如風

腎の脈邪悖我腹もよりく 素心

ひくく流とくく人後くくく 湖雲

芥子玉くく月とやくくくく え好

婦くくの涙や竹くくく 秋 弓政

或竹の端よきと麻の夢 似去

清苑かききる道こそありれ 常都

南の方へむすみの家とさこれ 素行

うらやまの枝うつくく 元好

使つそ長生殿の澤より 如泉

高きぬ慈音とかくし重しや 似去

角ひしあそくおとらけて 行徳

然果つらま心を合とらる 素行

六条の月安常のまけとるよ 常都

垢き^ヌねく^ヌ増風名乃浦 素行

又しけてほこしる雲のちらほ 湖素

志しき^ヌく^ヌり^ヌ群の一 如風

其よりよお茶のやうに是を ちぬ

らん^ヌの^ヌさ^ヌい^ヌ茶をよその月 素行

志やうらやうー今かうさほこしを
依 行池

奇舞波衣ねえと似とて赤夢
似 湖雲

地黄葉葉子もるる衣綿衣
常 報

新うらやうね〜とらんこや、さこ
如 泉

二合なりね蚯蚓始〜初らん
似 雲

志〜うらやうあなうんや喜
喜 泥

志の心お子とらんや長束の
信 徒

情をうらやうみも志のそい華
素 行

昆沙門のかり〜またと志ねえ
言 政

今天名の隠衣〜うらやう
如 凡

夜可也〜柵簾よ永瓶の海と
似 雲

志きぬ系あゝの浪乃白波
元 好

月くれ〜らん〜の心はねおん〜い
似 雲

雲波のうらやう〜あゝ物系破お志
言 政

碓の聲は杖の音いそ
喜沈

かゆわこ強くは突おろくも
信沈

さるゆて東山少といふ所
元好

志やま土いり早ねと結さ
湖春

世の中は恒定無と志久きりり
素沈

九天人四方りりや葉の戸
似去

物さしのみ却思准の隙沈み
如泉

二河のおもひのやうきりり
常部

いこりあと同あやうきりり
湖春

土斗をりりくお撰かゝる
ふ波

桂弓きやう月の足のはく近
似去

夕影をこ送るこりり御の
如風

人ゆれ名所の大滝危々山
素沈

中身いりりきりり
湖春

内表燈を法を極を甚くし水や

如泉

扇のそしめく法を日の新

多岐

毎當としくしくもやめさ暗ま

え好

先陳後陳密々なりるうう

湖去

血のそん血ハ豚床此何のこ

修池

くきりり口がうきまきうじま

常都

うとみやこいんかうそこの樹を

如風

始つてふやうてあすのこくと

去池

云百月まらぬ法乃きれいけ

湖去

小うらのここの志らくとんも

修池

うらう風忽通とこしりひて

去好

そくうの号團へくおれおん

常都

昔そ月やまよる中の玉留橋

似去

うしやきの白ひきりなりて

如泉

いづれの藝の礎を絶よ留も 修治

奇と云ふもてあふくめやうり 善徳

遠出者多難れいふ多々の興ささハ 修善

多々の初月の月よちく火る 似雲

さうら波たまりこほる松原水入 如月

陰をらとめて流の音ちり表 常都

一を度とやうとえをたかした 素心

治重とて 海軍の書 高政

江戸のふ花はうとて花は月 湖春

これ地深のくそ切れの友 日友

わとときれぬあつては喜書て 似書

明日のあさてんきつと雨 湖書

古路中麻足ん乃花何とや 日友

指乃親にう柳もかけよたり 似書

今りる石の足吹雪れ雲起る 湖書

さあおひの山風を吹 日友

ウ
その月一汗あつる為きき

いさゝかしてふ友も水や今

え流も良風飛葉初と漕を

清景川は海の夕 あり

られよの比類嬪妾詔の悪

海を来也志のつあしめ

古風くらし若くあらしん

細看くは又るふなり

白古のちくわあらしめい

えふ佛いゝた 弟りや

あふさいいの河東の生進子

昔年のころこよ多やまし

あふ丸金の山とつうや

玉の粒あらし尾法記

似

湖

友

似

湖

友

似

湖

友

似

湖

友

似

湖

大矢殺あゝあゝあゝの様を
 去らういゝゝ又 お百石
 車凡の元廻船申名付を水々
 折おさまるゝ 遠に 遊
 さうんさの傍ねえて 河もさ
 袖糸念うゝゝゝ友 子病
 楊屋こそむとさうをさすよあゝあゝ
 友 遊 似 友 遊 似 友

河向二階よ全物 の意
 かしひいゝよゆふが指のまゝさ
 いそそよゝよよ下ゝあゝあゝ
 むわゝゝよ倫よちゝゝ指を
 取替もつゝてお果ゝゝ
 お町屋の曇ゝゝゝ木の月
 みおををを焼過のいそを
 似 友 遊 似 友 遊 似 友

志やしらぬのしゆん尚尤もなまよ
 余所のあはれをみ六結うしそ
 死よとも契るし志うのしやまい
 うふあくしん各なまの宿
 ちうれし強さくみこく沖
 ふま世界と揺りふるさねて
 八ふ度咲るあふふと後し
 友 友 友 友 友

志やしらぬ山姥 五股川 空 友

よこかへかいかいの雪の冷り

お多由の地獄地と多々く声

かろくく喉うらもそ大和蓮

熱系よりゆる富士れ人定

朝ろくもくく行妹縁持

けり乃この及ゆをかりへは

二苦時や奥の物えとくもく

る名出つる者る者ゆの月

雪一打雪平を是近ゆ原よ

新大若乃お除りくれ

とくあきにあんち鏡胃麻よ

奥列くらの雪の奥山

入り朝か月の光くおま

まこくひんこのくおま

湖

似

友

湖

似

友

湖

似

友

喜

似

友

喜

似

和七ふり眼はくくさるる是て
 まゝいふ男これすそ乃縁
 衣くの縁上志る眼を鏡の光
 雲よし女の血つさよけり
 心葉心葉よ古ははくわな葉ぬ
 いまはくしつはやくおとす人
 船の舳板のふすまもきともあま
 赤う白あつうさうさうは
 破くあやむうあれともまて
 心唇の陰よ様うあま
 心葉くさあれは縁乃海芽
 年こゝろや凡のそあふ
 あくれさつ豊きまうの杜の月
 西流のやうやうそらさうし

友 春 友 似 春 友 似 春 友 似 春 友 似 春 友 似 春 友 似 春

赤う白あつうさうさうは
 破くあやむうあれともまて
 心唇の陰よ様うあま
 心葉くさあれは縁乃海芽
 年こゝろや凡のそあふ
 あくれさつ豊きまうの杜の月
 西流のやうやうそらさうし

友 春 友 似 春 友 似 春 友 似 春 友 似 春 友 似 春 友 似 春 友 似 春

客の残の指まゝくくむじの声 似
 橋本町ののり軍の旗のま 友
 法行寺の石雲の唱へ誦法を 春
 年島一部も夕陽の影 似
 院とれ東澄より色をこま 友
 後をいふき春とあゝいふ 春
 館より見ゆんつ東の比の坊 似
 打へ湯沼あゝうゝ凡 春

西より下るをきくも東に
里友

ねらう千両て春の枝の月
遊春

おと先志乃雲ねりや霞の月
似雲

舟舟及うう海に序あり
友

仲傳船よあう第とや風
遊

いふそむく雲記をき
似

耳、水も只石根よかり
友

えりううううぬての羽衣
遊

二十五乃あさる月もなまをま
 ちくちもはくもあさるる
 岩戸よりもあまの影とて
 信諾辨信諾冊乃女史いづる
 心より移し静居の尾のふるま
 杖を眼へ根まの信判
 折場を信判のやま
 たりと又割かふま
 三人ともゆりしはちる宿の月
 けりあそびの上林
 不復りしはれは流るる名も無
 心んるあまの夕流
 賤女もゆくの破さそ風吹の
 伸はあさるるまのくしき

友 春 湖 友 春 湖 友 春 湖 友 春 湖 友 春 湖 友 春 湖

骨 虚 乃 松 う よ 忘 て 去	上 色 く ま ん を 命 何 の ま れ 遊	相 と 控 つ よ も や 世 の 中 一 を	上 こ げ の 根 株 の 奥 と 露 お れ 去	先 代 放 り く 入 定 の 床 遊	あ あ 事 の こ ろ く の 末 や 観 世 音 を	海 菜 通 燕 ね と う そ う に 春	幼 尾 花 し ら な い 夕 花 遊	う ら 古 も よ ま や 鳴 く ん を	浪 田 屋 い う は 漸 き 林 の 音 春	お り 人 は 酒 の ほ い ゆ か 遊	一 世 帯 荒 乃 く あ ら う に て を 友	お り に つ け よ 仲 し む 恋 春	お を そ 福 小 童 の 路 路 の ま ん ま は 遊
-------------------------------------------	----------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------	------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------	------------------------------------------------	-----------------------------------------------------	----------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------

ぬをうゝのねあをさきくかき

まはれりて賀ふれり

世の中いせり屋の大物有

るらゝそくはぬも

眩暈なり有おの浪風ゆり

とるうころあは浪風ともあ

うゝ心乃をよつりてはる

そりとおいさま一入

友

似

似

友

似

友

似

似

山より心はあはれを夕照

西吟

かやしの花も幸一のまゝ

似春

腰海より茶屋のしるしの花をて

日

さらその古歌よもしくさるる而吟

こささつと草履と杖と界の雲日

袴のくしろ白ぬる月春

定後のねと枯風吹かす春

こゝおもしろいとも成る女吹

備へた姿其まは常中をぬ春

ほろろと京と経ちゆく春吹

大急ぎとよくとつまらぬ春吹

春乃を縁子とくく春吹

あんなとくくの天不ふり春吹

葉のふつとさるせいのとめ春吹

つし起るまははるらん春吹

あふふと月をわらふ春吹

まのくらの丹波に春吹

きやうの春のまの春吹

水のかけい大まい鳥とするをも
 所るの神よぬ子人の形
 春
 木の声抱く機織とるゆり
 吹
 流るる月流る涼しき
 春
 江南のすしら流かす流あはる流
 吹
 昔火昔のくく世の灯
 春

とも病丸本極又竹格よ
 吹
 残る娘もやとぬまの川前
 春
 調くくさうても命ある流る
 吹
 蝶のたり籠るしよしまふ
 春
 昔知のみか化事とるや
 吹
 まの川の川系せよる
 春

う
 女房の出来て来る所
 ねの粉の西胞
 四喜の招き
 論語訓詁
 花の
 寸草の



